

大正期の保育日誌にみる仏教系幼稚園の教育実践内容

三 吉 愛 子

(2022年10月7日受理)

Content of Educational Practice Buddhist Kindergarten as Seen in the Childcare Diary
in the Taisho Period

Aiko Miyoshi

Abstract: The purpose of this study was to clarify the actual situation of Buddhist kindergarten education by reading the childcare logbooks from the Taisho period. As a result, the characteristics of Buddhist kindergartens in the Taisho period were clarified. While the kindergarten activities were modeled after those of the kindergarten affiliated with Tokyo Women's Normal School, the first kindergarten in Japan established as a Flavorist kindergarten, the characteristics of the Buddhism (Jodo Shinshu) based kindergarten became clear. The "Kaishu" at Kaho Kindergarten was always held every morning as a childcare activity at the beginning of the day, suggesting its religious-based characteristics in the Taisho Period.

Key words: Childcare diary, Buddhist kindergarten, Kindergarten education, Taisho period, kaishu

キーワード：保育日誌、仏教系幼稚園、幼稚園教育、大正期、会集

1. 研究の目的と先行研究

現在、わが国の私立幼稚園は、設立母体によって一般保育と宗教保育を行っている園があり、宗教保育を大別すると多くはキリスト教保育と仏教保育に分けられている。キリスト教系幼稚園の設立については、1880（明治13）年に桜井女学校附属幼稚園が開設され、我が国におけるキリスト教主義の幼稚園の基礎を築いたことに始まり、その歴史や教育内容についても明らかである¹⁾。しかし、仏教系幼稚園の教育内容の起源については現在までも十分に明らかにされているとはいえない。現代における仏教系幼稚園の様に、その一日が合掌礼拝に始まり、生活の中に宗教的儀礼な

ど仏教精神を基にして宗教情操教育を取り入れた保育活動²⁾が行われていたことが推測されるが、実際にどのような実践がなされていたのか、また教育実践内容はどのようなものであったのか本稿の研究関心である。

これまで明治期以降の幼児教育研究の動向として、湯川（2007）は、地方の幼稚園教育史に関する史料・資料の発掘の必要性を述べ、東京女子師範学校³⁾以外についての幼稚園や、特に地方における大正期以降の幼稚園の実態の解明や検討は十分に進んでいないことを指摘している。またそのために、湯川（2019）は、当時の「保育日誌」の分析が進めば明治期大正期の保育を実践レベルで明確にできると示唆している。同様に穴戸（1988）は、史料の発掘、収集、整理という基本的な作業が低調であることや、史料が入手しやすい思想史、制度史、施設史などに重きがおかれ、具体的な保育内容や保育方法・カリキュラムなど現場の保育実践に踏み込んだ歴史的研究が少ないことを挙げてい

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：七木田敦（主任指導教員）、丸山恭司、山田浩之、中坪史典

る。さらに田中（1998）は、幼児教育の歴史的研究について公的な文書以外の日誌など幼児教育史料の発掘と収集の困難さを指摘し、小山（2012）は、幼稚園に焦点をあてた歴史的研究において地方幼稚園間の関係性の存在について十分に検討がなされてこなかったと指摘している。最近では金子（2013）が、東京女子師範学校附属幼稚園関係者以外の歴史の中で立ち消えていった地方の保育方法論などにも光を当て保育案や「保育日誌」の収集を通じ、保育実践変容の背後にあると思われる問題意識を探ってゆくことの必要性を明らかにしている。

このような歴史的背景の中で、我が国でも特有の宗教的な保育を実践してきた仏教系幼稚園の歴史については、現在までの研究では明らかにされてこなかった。岡田（1979）もこのことに触れ、「明治期における近代化の過程で、社会に生きる仏教としての道を求める僧たちによって、明治12年、福田会育児院が東京に設立され、その後も各地に育児院、(中略)幼児保育施設も設立され、幼稚保育所(新潟・明治21年)、華浦幼稚園(山口・同25年)、共愛幼稚園(兵庫・同30年)、常葉幼稚園(京都・同34年)、足利幼稚園(栃木・同34年)などが知られている。」と記載しているだけである。岡田（1979）が述べている我が国仏教系幼稚園の起源とされる華浦幼稚園とは、文部省刊行（1979）の『幼稚園教育百年史』によれば、「明治25年、山口県三田尻村の三田尻明覚寺に住職香川黙識が設置したものが創始である。」と明記されている。

日本の仏教系幼稚園の起源として存在した幼稚園、そして未だ言及されていない一地方の山口県の仏教系幼稚園の実際を、「保姆」の記載による「保育日誌」の史料から歴史的に明らかにすることにより、明治期から大正期に至る仏教系幼稚園の保育の内実に迫ることができるのではないかと考える。そこで本稿では、仏教系私立華浦（現鞠生）幼稚園（以下、華浦幼稚園と記載する）の大正期の「保育日誌」を読み解き、未だ明確にされていない創成期における仏教系幼稚園の教育実践内容の特質を明らかにすることを目的とする。その際に、現代の仏教系幼稚園の生活で欠かせない合掌礼拝を行っている「朝の会」の起源である「会集」（三吉，2018）の位置づけも確認する。併せて、時代背景や東京女子師範学校附属幼稚園などを照らし合わせ考察することで当時の仏教系幼稚園の保育の実際を浮かび上がらせることも試みる。

2. 仏教保育の歴史と華浦幼稚園史料

仏教保育の歴史を記すと、日本への仏教伝来以来、仏教の根本である慈悲を実現するために聖徳太子、光明皇后によって、寺院に施薬院、悲田院などが設けられたことから始まる。その後仏教保育は、1926（大正15）年の「幼稚園令」の制定をもって体系化された。これにより仏教寺院の経営する保育施設は増加し、1929（昭和4）年に「日本仏教保育協会」が設立された。それ以前についての保育実践は、各宗派の寺院による設立者の思いにより、1899年公布の「幼稚園保育及設備規程」の保育項目「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」を基盤としながらも、画一化されていない独自の教育内容を展開していたとの推測の域を出ない。

華浦幼稚園に残された史料としては、1911（明治44）年度の保育案、1914（大正3）年度保育日誌、1921（大正10）年度二ノ組保育日誌、1922（大正11）年度一ノ組・三ノ組保育日誌、1943（昭和18）年度の保育日誌、および大正3年度製作帳（毎月の作品）、明治41年度以降卒園児名簿、明治41年度会計簿、昭和15年度個性調査表、その他、園舎や園児の写真などがある。また、園長香川黙識の関係者に関する写真や史料などは、明覚寺において所蔵されている。

本稿で使用する大正期の保育日誌史料は、1914（大正3）年度、1921（大正10）年度二ノ組、1922（大正11）年度一ノ組・三ノ組の保育日誌4冊である。また、写真1. 2. 3に示す通り、和綴じで、半ページ12行の見開き24行を半分に折った和紙を使用し、縦書き野紙に墨筆で書かれている。書体については、くずし文字など含む行書体で書かれている。

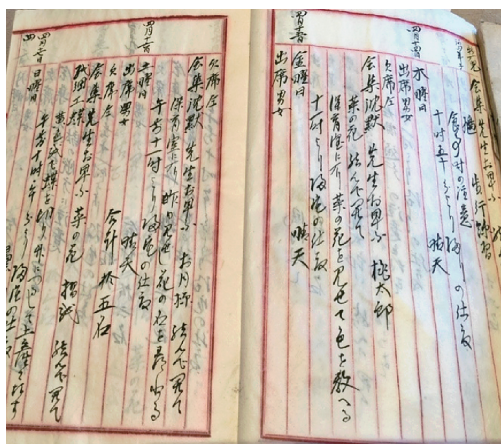


写真1. 『保育日誌』大正10年度二ノ組より

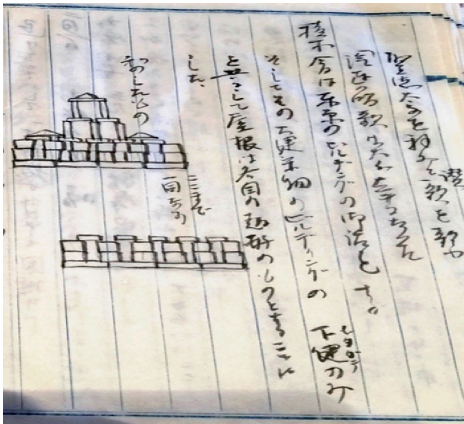


写真2. 『保育日誌』大正11年度一ノ組より

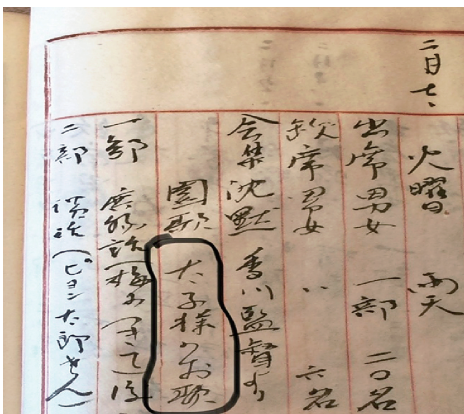


写真3. 『保育日誌』大正10年度二ノ組より

傾向にとどまらず、「桃太郎主義」などの名前で鍛錬主義の硬派教育も行われている⁴⁾。このように、明治期から大正期にかけて、保母主導型における保育から児童中心主義保育への変遷があった時期である。

以下、1914（大正3）年度、1921（大正10）年度二ノ組、1922（大正11）年度一ノ組・三ノ組の大正期の各年度から抜粋した四月から三月の一年間を理解できる一例としての史料の一部を掲載し、考察の際には、全ての日誌解読から抽出した関連内容も含めて考察する。

分析の視点としては、1899（明治32）年に文部省が公布した国として最初の幼稚園についての基準である「幼稚園保育及設備規程」の内容と先行研究をもとに、その時代の幼稚園の実際を捉えるために、特に3つの視点から仏教系幼稚園の教育実践内容を考察する。まず第一に、幼稚園の目的・内容・規則等についての視点である。これは、従来は東京女子師範学校附属幼稚園園則を範としていたのに対して、幼稚園について初めての詳細な法的規定である「幼稚園保育及設備規程」に基づき、幼稚園に必要な規定を定めている内容を確認することによって、仏教系幼稚園の実態が明らかになると考える。次に、幼稚園の1日の保育課程の類型についてである。これにより、フレーベル主義幼稚園の受容による東京女子師範学校附属幼稚園の保育課程との関係（湯川、2001）を確認できる。そして最後に、幼稚園の年間行事や生活内容について考察することで、現代の幼稚園の教育実践との比較も可能となる。

なお、本稿での日誌内容の記載については、今日では不適切とされるような表現もみられるが、当時の文脈・状況に照らして分析を進める際の参考となるよう原文のまま掲載した。

3. 大正期の保育と日誌分析

幼稚園教育百年史（1979）によると、「大正期における保育内容と指導の特徴を概括していえば、このころに、小学校教育の中で台頭した新教育運動（自由教育運動）の影響を受けながら、自由保育・生活保育などの新しい教育方法をさらに発展させる努力が行われる一方、これらを無批判に取り入れることに対する反対から改めてフレーベルの恩物を見直そうとする機運が生まれるなど、新旧様々な考えに基づく保育内容や指導法が考案実施されたことである。」として、モンテッソーリ法や、プロジェクト・メソッド、土川五郎の律動遊戯、小林宗作による日本リトミック運動、塗り絵、ごっこ遊び、共同製作、分団保育、幼児劇を行ったり、英語の会話を教える幼稚園もあり、大正時代は進歩的な種々の試みがかなり自由に行われたところに大きな特色が見られる。また、必ずしも自由化の

3-1. 幼稚園の目的・内容・規則等について

史料1 大正十一年度 一ノ組 四月四日

四月四日 火曜日 晴

新入園児 安田健治 他 十八名

進級生 時政好子 他 十二名

新入日の事とて父母兄姉同伴って入園なし混雑一方ならず/九時半振鈴なして入室 組を分ちて父兄母姉に対して/この園の主旨及び登園注意を話し、旧園児の遊戯唱歌を/なし通知簿を渡して煎餅二枚づつ与へて、十一時分解散/入園料 五十銭 受納

史料2 大正十一年度 一ノ組 四月五日

四月五日水曜日 曇

出席 男女 三二/缺席 男女 ○

九時半振鈴・縦列をなさしむに全く、困難す

会集 円列を作らしむうる どうかこうかなすに出来る沈黙は非常に／上出来なりき／カレンダー（渡辺克二）下駄の仕末朝の御行儀に就きて、香川監督より話あり／歌に合わして拍手なさしむ会集後、但ちに入室なして／便所の使用法、朝の御行儀など申して十時五十分解散

史料3 大正十一年度 一ノ組 六月廿七日

六月廿七日 火曜日 曇

出席男女 二六／缺々々 七

九時入室 皆仲よくして心切をしませう

人を打たないことにしませう

会集 非常に静なりき 近日稀に出来る出来ばえなり

一太郎の出征よりの御話ありたり

蟻のここと教ふ 少しむつかしき様なり

涼きため 外で平和に遊ぶ

貝並 花はじき 自由になさしめしところ 大変よく出来／思考出来たものは感心／遊戯 靴がなる 練習 午後一時雨にならんとる橋を渡さりて帰宅なさしむ

大正期の日誌から、第一学期は4月から始まり（入園式・始業式）、3学期は3月末で終了（卒業式・修了式）していることが理解できる。史料1によると、在園児13名と新たに入園する園児（5歳児）19名、合計32名1クラスとする一ノ組の新入日は、保護者や兄弟姉妹を伴っての入園となり、混雑も普通ではなく大変な状態であった。9時半に合図のための鈴を振り鳴らして入室する。クラス毎に分かれて、保護者に対する園の趣旨や登園する際の諸注意など話し、在園児による遊戯と唱歌を披露している。ご褒美として煎餅を2枚ずつ配り、11時に降園としている。そして、入園式当日に、入園料として50銭を納入している。

大正期の1クラスの人数としては、1899（明治32）年、文部省令第32号「幼稚園保育及設備規程」において「第3条 保母一人ノ保育スル幼児ノ数ハ四十人以上トス」となっていることから、この園でも一人の保育者によるクラスで、30人を超える人数を一斉に行う保育を進めていたことが伺える。また、4月の入園式後も新入園児の途中入園は多く、大正3年度の日誌からは、9月1日に3名、9月2日に3名、9月4日に1名と、特に二学期の始まりに新入園児が多く見られた。なお、現在の幼稚園で連絡帳やシールノートと言われる物は、通知簿と呼ばれ評価を行うノートである。当時は、入園料も、入園式当日に支払うシステムとなっていることが読み取れた。

また、史料2の通り入園式の次の日から「会集」が毎朝必ず行われている。「会集」とは朝の始めになさ

れる集まりのことである（三吉、2018）。集団生活を送る上で保育者が重要視している点は、円列・縦列など整列をさせたり、静かにさせたり、片付けや行儀など行われる形式的な躰の内容であるが、一斉指導する際の外側からの形づくりなど規範やルールに関する内容である。入園後すぐ最初に徹底していることが読み取れる。

さらに、全年度の日誌において4月中頃は、菜種の花の色や葉の色と、浄土真宗の仏旗である六金色旗の黄緑青赤紫の色を教えている。また史料2、3の通り、「会集」では、園長先生からの注意事項を聞くことで、話を聞くときの静かにするマナーなど、入園当初に徹底した園児のお行儀やしつけの体制を整えていることが読み取れる。新学期や入園時には、保育内容の項目についての実施よりも、園として、集団生活を送る上での規律を守ることの大切さを諭していくことに力を注いでいる。また、日誌の中に、園児の個人名を記載している（史料2）ことから、集団を大切にしながらも新入園児の個人をよく見守っていることがわかる。

3-2. 幼稚園の1日の保育課程の類型について

史料4 大正十一年度 一ノ組 四月六日

四月六日木曜日 曇

出席 男女 三二／缺席 〇

九時半 振鈴 但ちに入室「円」に就きて教え色の赤黄白を／教ふ 但ちに会集

会集 園長より 一寸沈黙に就て注意あり上手に静に終る／園歌二節まで教へ桃太郎・鳩ポポロなど一しよに歌ふ／それより外出にて 十時半より入室 黄色の葉の花／に就て蝶の来る原因を話し 十一時解散

史料5 大正十一年度 一ノ組 五月十七日

五月十七日水曜日 晴

出席男女 二七名／缺席 〇 七名

九時入室人間の死んで行くところ御佛に救っていただかね／ばならないとて 蔭で悪いことは決してしてはならない／御佛が皆しってゐられること など話す

会集 静かなりき 平兵衛さんと権兵衛さんとの御話／を半分 香川監督よりありたり／貝並（花はぢき）遊戯 体操は非常になし 浦島さん、飛行機／雀の子端午 お日様／静なるお食事をすます 大変うれしさうなり／午前十一時半解散

史料6 大正十年度 二ノ組 十二月六日

十二月六日 火曜日 晴

会集 香川監督より朝夜具をとり片付けること

ストーブの歌を大体教へる

談話（黄金の虎）

板並 三角8枚 四角9枚 家 燈籠

遊戯 大江山 雀の子 雀のお宿 午後一時半

次に、1日の保育課程の類型について述べる。史料4からは、「園歌二節まで教へ」や「桃太郎・鳩ぼっぼなど一しょに歌ふ」など入園児が園生活に慣れ始めていくと共に、保育案に沿った充実した保育内容が展開されていくことが読み取れる。史料5からは「貝並べ」「遊戯」「体操」などが行われていることがわかる。

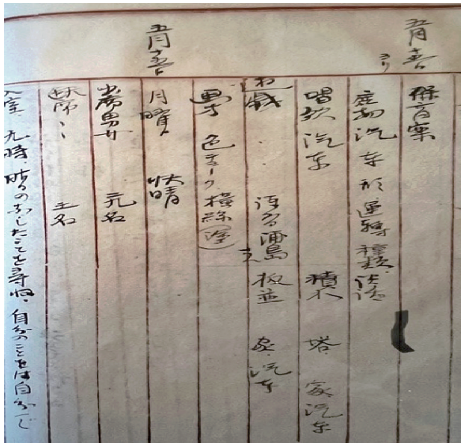


写真4. 『保育日誌』大正11年度一ノ組より

また、写真4の大正11年度一ノ組をみると、保育日誌の中に保育案が「庶物」汽車 形 運転 種類「談話」「唱歌」汽車「積木」塔 家 汽車「遊戯」練習浦島さん「板並」家 汽車「画方」色チョーク 横線（塗）など「5月15日より」として記載されている。月毎や週毎の保育案が他の日誌の中にも明記されており、現在でいう年間計画に基づいた月案や週案が詳細に計画されていることが読み取れ、仏教系幼稚園においても、目的をもった計画による教育内容の展開がされているといえる。これは、全国的に示された教育内容として「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」の四項目を示すだけにとどめられ自由保育への道を開いているところから、仏教系私立華浦幼稚園の保育も随意工夫がみられている。山口県の当時の保育はフレーベル主義が中心であったが、次第に自由保育も取り入れられてきた（山口県教育史, 1986）。大正3年の「保育日誌」を見ると、「切紙、貼紙、摺紙、豆細工、板排、箸排、貝排、紐置、画キ方、積木、談話」等が保育に盛り込まれている。自由遊びとしては、男子はブランコ、シーソー、まりなげ、力比べ、動物ごっこ、縄跳び、女子

は、学校ごっこ、いも虫ごごろ、あやとりなどが見られる。特に、保育案としては記載されていない「会集」は、毎朝必ず第一番目に位置付けられており、毎日必ず行われていることが日誌の中から見受けられた。

大正期の時代背景としては、大正期の学校教育は、明治期の蓄積の上になされた教育の一層の普及進展により具体的に言えば 就学率の向上による学校教育、特に中・高等教育の拡充といゆる大正デモクラシーに基づく大正新教育（自由教育）とそれに対する統制あるいは国家的要請の強化という点においてその特徴を捉えることができる（山口県教育史, 1986）。これは政府による教育の進展と自由と統制の影響であり、いわば大正期の教育の伏線はすでに明治期後半、それも仏教系幼稚園にもあったということがうかがえるのである。1911（明治）44年7月に「小学校令施行規則」の一部が改正された。改正の要旨は、小学校のように画一的にせず 保育時間や学級定員を緩和し、地域の実情に即しより多く子どもたちが就園できるようにすることにあった。仏教系の幼稚園にあっても教育内容は「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」の四項目を示すだけにとどめられ自由保育への経路がひかれていた（史料6）。また、明治41年に中村五六、和田実によって書かれた『幼児教育法』には「幼児の生活活動は遊戯と習慣の集まり」とであると主張されている。この考え方は、東京女子師範学校主事の倉橋惣三によって受け継がれ、モンテッソーリ教育法と言われる感覚教育が取り入れられ、児童中心の自由保育が行われた（幼稚園教育百年史, 1979）。仏教系私立華浦幼稚園においても、全国的な大正期の保育内容の潮流に抗することなく、土川五郎の律動遊戯が子どもを「生き生きさせる」として取り入れられたり、宗教の枠を超えた「神社での園外保育」なども盛んに行われたのである。

保育日誌の中に記載している保育案も「庶物」「唱歌」「積木」「遊戯」「画方」「談話」「手技」について立てられており、保育案に沿った日々の保育内容が当時の保育の潮流に意欲的な保育者によって実践が進められていることがその記載から推察される。分析対象の日誌が作成された時期は、倉橋惣三が東京女子師範学校附属幼稚園の主事に就任して、幼稚園改革に着手したり、子どもにとって画一的で緊張感を求めすぎる「会集」を廃止した時期で、全国的に「会集」を取りやめる園も多くなっていた。しかし華浦幼稚園においては、そのような潮流に乗ずることなく、仏教系幼稚園の本義として認識され毎朝行われていた。日常の保育においても、仏教の教義をもとに礼儀作法や、さらに小学校の修身科と同様に道徳的指導などを行っているなど時代の空気と逆行した取り組みに熱心であったことも

読み取れる。一方、「談話」の時間には様々な話が自由に盛り込まれるようになった。その後、宗教的な説話も「談話」の中で行われるようになり、説話色のある「談話」が「会集」の中で行なわれるようになった。華浦幼稚園ではこのような「会集」を、保育の中心に位置づけていたと考えていたといえる。唱歌に関しては、式典などの際は、「君が代」も歌われているが、日々の保育の中では「聖徳太子の歌」の方が多く歌われている（写真3 大正10年度二ノ組2月7日）。

3-3. 幼稚園の年間行事や生活内容について

史料7 大正十一年度 一ノ組 六月三〇日

六月三〇日 金曜日 晴
九時入室 / 出席男女 / 缺々々
会集 皆様御休みに就き私が「小人」の御話をなす
少し永かった様だったが 御行儀よくてうれし
神徳園医こられて目と齒の検査をなす
恐れる子供なく眼病は一人もなく 江川さん一人
水晶かく膜炎…齒は大部齲歯あり
積木 よろこびてなせり 自由になさしむ
遊戯 段々上手になりてよろこばし
午後一時解散

史料8 大正十一年度 一ノ組 四月四日

七月十五日 土曜日 晴れ
出席男女 二十五 / 欠席七
九時入室山口へ行きしことを申しその日まで来る皆は
強い子 / 泣く子は一番弱い喧嘩する子もまた弱い
会集 昨日の園長のお話の復習 / 夏休みの歌を教ふ
皆静なれども 中には悪き子もありたり / 手技貼紙
ノートの表紙張 / 大変 よく出来 たり / 十一時帰宅

史料9 大正十年度 七月十七日

七月十七日 月曜日 晴れ
出席男女 二十一 / 欠席九 九時入室
会集 もう二つ夜が来たら夏休み / 親切とは
日本の子供は 賢愛健

史料10 大正十一年度 一ノ組 七月十八日

七月十八日 火曜日 晴れ
出席男女 二十一 / 欠席 九
九時 入室 会集非常に静かなりき 休暇になること
衛生について / 香川監督より申さる
夏休みの歌は大変よく出来る
御話 大変面白がる / 十一時解散

史料11 大正十一年度 一ノ組 九月一日

九月一日 始業式 晴天 第2保育期
出席男女 二五 / 缺席 五
かくて40日の休暇も今日でいよいよ閉じられ一同は
物珍しさと退屈な生活より起こる刺激の欲望により
起こる一種の緊張を以て一日を持ったことは非常に愉快なことだった
8時半始 ご機嫌やう 夏休みの楽しかったことを尋ねる / 会集 非常に静かなりて私共の驚異の眼は輝けり / カレンダーを貼り皆の好きな歌を尋ねて日本兵士を遊戯さして 通知簿を渡し10時半 帰宅す

史料12 大正三年度 一ノ組 十月十三日

十月十三日 金曜日 晴
出席男女 二五 / 缺席 五
いよいよ待ちこがれし運動会なりき

史料13 大正十年度 二ノ組 一月一日

一月一日 日曜日 晴天時雨
午前10時より年賀式
御目度出うの挨拶
沈黙 君が代 最敬礼 園歌 御伽話
お正月の歌
紅白のお饅頭をお土産に渡す
11時半頃 笑顔に満ちて解散

史料14 大正三年度 三月二十四日

三月二十四日 水曜日 晴
出席 三拾九名 / 欠席 二名
本日午前九時三十分挙式 来賓三拾名アリ
卒園証書授與

史料15 大正十一年度 三ノ組 三月二十一日

三月二十一日 午前10時より卒園の式
第一部
午前10時 振鈴（園児立列 来賓着席）
挨拶 沈黙5分間 園歌 太子様歌
遊戯数曲 15分休憩
第二部
振鈴 起立 最敬 君が代
証書授与 皆勤賞 園長訓話 来賓祝辞
園児謝辞
卒園式歌 終わり

最後の視点としては、6.7月の保育案や保育実践を見ていくと、「積木」第五号恩物で門・家・学校・軍艦「庶物話」金魚・梅雨・尾びれ・えら・色・住居

「談話」「唱歌」金魚「板並」花・うちわ・車「遊戯」「切紙」三角紙自由「手技」など、年間行事や日本の伝統・文化・季節を中心として幼稚園教育を実践していることが読み取れた。これは、当時の幼稚園では保育案を立案する際に、必ず日本の伝統文化や年間行事を中心に据えた保育内容を園生活の年間計画に盛り込んでおり、現代の幼稚園との共通性を持つと理解できる。また、5月頃からお弁当が始まり、子どもたちも園生活に慣れ始めたことから、喧嘩やトラブルなども多くなり、「会集」の内容に、「戒めや規範」を求めることが多くなっていく。さらに、頭手足、皮膚の清潔や手の爪や洗面についての検査も行われ、日常の衛生面に対する注意も華浦幼稚園においては、「会集」の時間の中で行われている。史料7の6月30日の日誌からも「蠅を触らぬように」や、「生水を飲まぬように」と注意を促したり、園医による目と歯の検診も行われている。これまで主には仏教的な教義の伝達場であった「会集」がここへきて、広く幼児の生活全般に対しての情報の提供や気づきを促す方途として用いられるようになってくるのである。

大正11年度一組の日誌から、4月4日入学式、7月19日から8月31日までは夏休み、12月22日から1月9日冬休み、3月21日（史料15）は卒業式（大正3年度は3月24日史料14）となっており、現代の幼稚園教育の中での第3学期制の状況と同じである。7月の保育は、夏休みを前に諸注意などをし、第一学期のまとめとしての保育活動が行われるのも同様である（史料8・9・10）。保護者会も行われ家庭との連携も頻繁に行われていた。第一学期には、園生活で重要視している決まりごとなどの徹底に力を注ぎ、そして、10月の運動会（史料12）や3月の卒園式に向けての日々の教育内容の充実させるように保育実践をまとめ上げていく計画は、現代の保育に繋がるものである。

興味深いのは、行事のある日であっても、必ず「会集」の時間が設けられていた点は、仏教系華浦幼稚園の特徴といえる。大正11年度一組六月十七日金曜日の日誌において、「会集 静かなりき 沈黙中の考へることに就いて / 尋ねしに香川さんの天皇陛下には忠義をなすこと / 先生のいいつけを聞くことと云いり」からは、沈黙の際に頭の中で何を考えているかなども質問などをして朝の礼拝の意味を少しずつ理解させていることが読み取れる。また、全ての年度で一月一日に一年の始まりの挨拶をする新年の年賀式という行事が行われており（史料13）、現代の幼稚園では行われていない行事である。さらに、園長の死去（大正11年度4月12日）に伴う行事なども重なり、日常的な子どもの成長過程に仏教的慣行が持つ文化伝達に対する役割に

着目している点も示唆された。

他の年間行事に関しては、重要な行事以外は、現代のように大々的に行なわれている訳ではなく、日頃の保育の中で、お話を聞き、歌を歌い、折り紙をしたり絵を描いたり製作をしたりする程度に抑えられており、あくまでも日々の保育としての毎日の繰り返しを重要視している。

4. 総合考察と今後の課題

本研究は、これまで断片的な情報だけであった仏教系幼稚園教育の実践について、明治期から大正期にかけて記された保育日誌を読み解くことにより、連続的な保育の営みとして明示することを目的としたものである。我が国の仏教系幼稚園の起源を持つと言われる華浦幼稚園では、フレーベル思想に基づく東京女子師範学校附属幼稚園における教育内容の類型と同様な保育が展開されながらも、必ず仏教的な色彩の濃い「会集」を園の生活のはじめに置いていた。東京女子師範学校附属幼稚園やそれを範とする他の幼稚園では「会集」の時間の中に、「唱歌」や「お遊戯」を行うことが多かった。1891（明治24）年には、幼児への負担や儀式化への反発から、「会集」の時間も短くなり、また大正期になると「会集」自体も行われなくなっていく（三吉、2018）。しかし、華浦幼稚園では、はじめは教訓色の強い仏教の内容についての「談話」が「会集」で行われはしたものの、時代の変遷とともに、幼児の生活への気づきや諸注意、仏教の説話にとられない内容に変容していった。

一日のスケジュール「会集」の位置付けは大きい。保育者による多くの記載がされており、仏教系幼稚園の時間の中で重要視されていることが明らかである。「会集」中の園児の様子や教師と園児のやりとりについてもいきいきと描写されていた。また「会集」の取り組みだけではなく、教育実践内容においても、明治期に一般化したフレーベル主義幼稚園の内容が継続され、「恩物」による保育も行われたり、小学校令施行規則に則り「遊嬉」「唱歌」「手技」「談話」の実践も垣間見られた。さらには当時、流行していた土川五郎の律動遊戯や、「手技」作品を持ち帰らせる「お土産」といった先進的な試みも実施されていた。これらのことは、仏教的な教義を中心とした保育を展開している仏教系幼稚園という、これまでの画一的なイメージを塗り替えるものであると考えられる。

本稿では、明治期から大正期の仏教系私立華浦幼稚園の保育日誌の解説から、断片的にしか明らかにされていなかった大正期の仏教系幼稚園の教育実践内容の

実際と「会集」の位置づけを明確にすることができた。併せて華浦幼稚園ではフレール主義幼稚園として設立された東京女子師範学校附属幼稚園の保育内容も取り入れつつ、また時代の潮流にも敏感に反応しながら、仏教（浄土真宗）を基盤とした独自の教育実践を進めていることが特徴として明示された。しかしながら本研究では、仏教系幼稚園教育の実際について明らかにする際に、明治期から大正期にかけて連続した保育日誌という記録を対象とすることはできず、厳密にはその実際を詳細に描ききることはできなかった。今後はさらにその間隙を埋める資料を発掘し、明治期から大正期にかけての仏教系幼稚園の全体像に迫りたいと考える。

【注】

- 1) 文部省 (1979) 『幼稚園教育百年史』 43頁.
キリスト教保育百年史編纂委員会編 (1986) 『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟.
- 2) 日本仏教保育協会編 (2004) 『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社. 両手を合わせ深く頭を下げることにより、精神を安定させ自己省察するのに最も良い姿勢であり信仰の典型的な形をあらわしている。仏教系幼稚園では、生命尊重を仏教保育の柱の第一に挙げている。その内容は各宗の教えや各園の創立者の建学の理念や子どもたちへの期待が深くかつ厚く込められているものである。
- 3) 東京女子師範学校は、東京師範学校女子部、高等師範学校女子部、女子高等師範学校、東京女子高等師範学校と、時期により名称が異なるが、本論文の附属幼稚園は全てを東京女子師範学校附属幼稚園と記すこととする。
- 4) 文部省 (1979) 『幼稚園教育百年史』 147頁. この派はその時代の軟派教育法に反対して精神的にも肉体的にも強い幼児を育てようとした。

【引用文献】

- 浅井幸子, 2008, 「明治末における保育記録の成立過程保育者の語りにおける実践の意味に着目して」『幼児教育史研究』 3: 17-32.
- 東基吉, 1904, 『幼稚園保育法』目黒書店.
- 橋川喜美代, 2003, 『保育形態論の変遷』春風社.
- 上笙一郎・山崎朋子, 1994, 『日本の幼稚園』筑摩書房.
- 金子嘉秀, 2013, 「明治後期の幼稚園におけるフレール主義をめぐる保育実践の変容に関する研究－京阪神および広島女学校附属幼稚園を中心として－」
- 広島大学大学院教育学研究科2013年度博士論文.
- 国吉栄, 2005, 『日本幼稚園史序説 関信三と近代日本の黎明』新読書社.
- 倉橋惣三, 2017, 『保育人間学セレクション 6 児童文化・宗教教育』, 学術出版会.
- 倉橋惣三・新庄よし子, 1934, 『日本幼稚園史』東洋図書.
- 小山みずえ, 2012, 『近代日本幼稚園教育実践史の研究』学術出版社.
- 文部省, 1979, 『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社.
- 三吉愛子, 2018, 「我が国の幼稚園における「会集」の歴史－東京女子師範学校附属幼稚園を中心に－」『広島国際大学センター紀要』 3: 43-51.
- 三吉愛子, 2019, 「明治期における山口県の幼稚園教育に関する研究－日本最古の仏教系私立幼稚園華浦（現鞠生）幼稚園のはじまりに着目して－」『広島国際大学紀要』 15: 13-29.
- 三吉愛子, 2022, 「幼稚園教育実践内容の「会集」に関する研究－仏教系幼稚園の大正11年度の保育日誌を中心に－」『保育文化研究』 14: 49-58.
- 長江侑紀・鈴木康弘・若林陽子・森田怜・戸高南帆・彦坂春森・福元真由美, 2019, 「近現代日本の保育史研究の動向と課題：2007年～2017年の研究を中心に」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』 70(1): 73-89.
- 中村五六, 1893, 『幼稚園摘葉』普及舎.
- 中村五六・和田實, 1908, 『幼児教育法』東京堂.
- 西小路勝子, 2011, 「子どもに寄り添う保育実践の黎明－大阪市立愛珠幼稚園の保育記録(明治28～40年)からの論考－」『保育学研究』 49(1): 6-17.
- 日本保育学会, 2010, 『日本幼児保育研究 第1.2.3巻』日本図書センター.
- 岡田正章, 1979, 『幼児保育小辞典』日本らいぶらり.
- 岡田正章, 1963, 「明治初期の幼稚園論についての研究 (1)」『人文学報』第31号, pp.69-90.
- お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園, 1976, 『年表 幼稚園百年史』国土社.
- 太田素子・浅井幸子, 2012, 『保育と家庭教育の誕生』藤原書店.
- 太田素子・湯川嘉津美, 2021 『幼児教育史研究の新天地 平〈上巻〉－近世・近代の子育てと幼児教育－』
- 穴戸健夫, 1998, 『日本の幼児保育 昭和保育思想史』上巻, 青木書店.
- 田中まさ子, 1998, 『幼児教育方法史研究－保育者と子どもの共生的生活に基づく方法論の探究－』風間書房.
- 山口県教育会1986, 『山口県教育史』

大正期の保育日誌にみる仏教系幼稚園の教育実践内容

湯川嘉津美, 2007, 「日本幼児教育史の研究の到達点と課題」(シンポジウム記録)『幼児教育史研究』1: 1-36.
湯川嘉津美, 2001, 『日本幼稚園成立史の研究』風間

書房.

湯川嘉津美, 1994, 「明治初期地方における幼稚園受容の性格－大阪市府立模範幼稚園の事例を中心に－」『香川大学教育学部研究報告』1(88): 163-187.